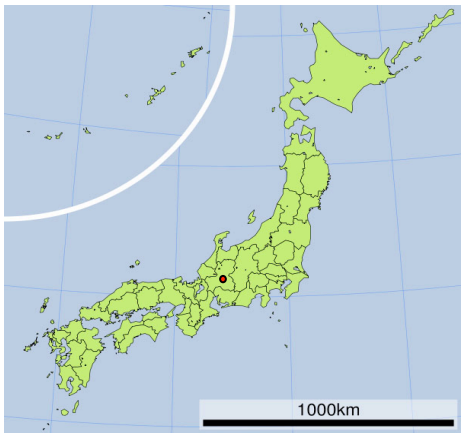
滋賀県高島市安曇川町にある小川



私の実家がある地域（滋賀県高島市安曇川町）は、昔から水、特に川ととても近い生活をしてきた。それはおそらく、滋賀県には琵琶湖という日本で一番大きな湖があること、町に町の名前の由来である安曇川という川や、鴨川という川（京都の鴨川とは別物）など多くの河川が存在することなどが関係しているのではないかと思う。生活が現代化され自然を生活の中に感じることが少なくなった今でも、我が家の近くでは、川ととても近い生活をしていた頃の、痕跡を見ることができる。今回は、我が家の前を流れる、私を含め家族が昔から関わってきた川を取り上げる。

川の様子と思い出

それは川と言うよりも水路と言った様子のもので、川幅はわずか１メートルほどである。地面から川底までの深さは、１．１メートルほどあるが水の深さは最も深いときで、４０センチほどしかない。水の少ない夏などには、水深約１０センチほどになってしまうこともある。私が小さかった頃は、直接各家庭からの生活排水が川に流されており、水質が悪い時期もあった。子供心に、洗剤などが混ざった水を直接流していることに、とてもショックを受けたことを記憶している。しかし、少しずつ下水道の整備が進み、今では、家庭で浄化作業を終えた水だけが川に流されるようになった。冬休みに帰省した時には、水深約１５センチほどで、川底がしっかり見えるほどに透き通っていた。

コンクリートで固められてはいるが、川底には砂利があり、岸壁の所々に苔や水草も生えている。また、田螺、ザリガニ、沢ガニ、鮴などが沢山生息している。水が少なくなる夏には、鮎、はすの子、などの姿も見られる。年に１度地域行事として、川掃除が毎年行われるのだが、そのときには住処から追い出された魚たちが多く川を行き交っている。そのような時には比較的大きな鯉を見かけることもあれば、１度などは、体長２０センチほどのナマズを捕まえたこともある。この川の水源は　地域の農業水などで、最終的には琵琶湖に注いでいる。もちろんこのような小さな川には名前もなければ、ウェブ上にもその川についての情報は存在しない。

保育園や小学校低学年の頃は、よくサンダルなどで川に入り、水遊びをしたり、網や空き缶空き瓶で魚を捕まえたりして遊んでいた。遊んでいる間に、石で足を擦りむいたり、蛭に吸い付かれるというハプニングもあったが、今となってはそれらも懐かしい思い出である。とても緩やかな流れではあるが、うっかりしていて、サンダルや水遊び道具を流されてしまったこともある。また夏には、岸辺で花火をよく行っていた。そして、燃えがらを川に捨てていた当時を思うと、とんでもない環境破壊を行っていたのだと、今更ながら反省の気持ちが沸いてくる。

父親が子どもだった頃にもその川は存在しており、今よりももっと多くの魚が住んでいたようである。一応魚の名前を挙げてみると、鮠、ぼったいなどであるが、私に取ってはもはやなじみのないものばかりである。当時でも川は子どもの格好の遊び場で、魚取りや行水などをしていたとのことである。もちろん下水道などは完備されていない時代ではあったが、家庭からの生活排水も今ほど汚染されていた訳ではないことから予想して、水質はとてもよかったのではないだろうか。

川にみられる地域性

冒頭でも述べたように、川と近い生活を送ってきたため、川の周りには今でもその痕跡を見ることができる。その１つが「川端（かわた）」の存在である。川端とは、家沿いの川岸を７０センチほど掘り下げて作られた、流れに近い地面のことである。そのような場所があることで、わざわざ水を川底からくみ上げたり、川に入ることなく、川端にしゃがむだけで簡単に水を使うことができるのである。ちょっとした洗い物などはそこですませることができ、また子どもが水遊びなどをするのにもとても都合のよい場所である。

昔は川沿いの家にならばどこにでもあった物のようであるが、最近の再開発で少しずつ川端はなくなりつつある。しかし、我が家にはまだそれがあり、未だに使用し続けている。水がとてもきれいだった昔は、川の水で畑から収穫した野菜などを洗っていたようである。最近ではさすがに食べ物を洗うことはないが、バケツや土のついた靴などを洗い流す程度のことは日常的に行っている。また植木ようの水なども川端を使って川からくみ出すことが多い。昔ほど川に依存していない今はそれほどありがたみを感じる物ではないが、昔の人々に取ってはとても有意義だったのだろうと思うと同時に、彼らのちょっとした思いつきと工夫に関心を感じさせてくれる物である。

もう１つの痕跡としては、川沿いに作られた池があげられる。川と隣接した形で人工の池を作り、そこで鯉などの魚を飼っていたのである。池が川と繋がっているので、水は常に新鮮に保たれるが、川と池の間には網が張られている

ので、魚が逃げ出すことはない。このような池も時代とともになくなりつつあるが、我が家にはまだ２．５畳ほどの池があり、何匹かの真鯉を飼育している。今ではただいるだけで、たまに残飯などを食べてくれるだけの鯉だが、昔は特別な日のための食材として飼われていたようである。結婚のお祝いや祭りの際に、家族で鯉をさばいて食べたという話を親戚から聞いたことがある。おそらく鯉を食すると言うのも、湖や川の近くならではの習慣なのではないだろうか。

　最近は実家に帰ることも少なく、また帰った時にも川などに注目することなどほとんどないため、川は私からすっかり遠のいた存在になっていた。しかし、こうしてじっくり思い出してみると、いろいろな思い出があり、とても懐かしい。また川の特性なども地域の風習にならっており、とても興味深く感じる。町の開発が進むにつれて、コンクリートで完璧に固められた生き物が住みにくい川が増えたり、また鉄板やセメントの板でふたをされ、川自体が見える部分も減りつつあるのが現状である。また開発に伴い、昔からの伝統的な川との関わりを教えてくれる痕跡が急激に少なくなっているようである。子どもたちが楽しく自然と身近に遊べる場所を残すためにも、伝統の痕跡を消し去らないためにも、そして川に住む生き物たちのためにも、今ある川の姿を未来にも届けられたらと願う。